梅若会定式能　平成28年6月19日（日）

能『杜若』恋之舞

業平が「杜若」を詠んだ歌「からころも　きつつ馴れにし　つましあれば　はるばる来ぬる　たびをしぞ　思ふ」について、美しい女性の姿をした杜若の精が語ります。物着の後は、高子の后の衣装と、また彼女の恋人である業平の形見の冠をつけた姿で、業平をめぐる恋愛物語を歌っていきます。

能　「杜若」恋之舞　　シテ（杜若ノ精）　　松山 隆之
　　ワキ（旅僧）　　則久 英志

□あらすじ

京都の名所旧跡を巡り終えた諸国遊歴の僧（ワキ）が諸国行脚に出て三河の八橋に来た。ここの沢辺で今を盛りの杜若に見とれていると、若い女（シテ）から声をかけられた。女は、ここを八橋と呼ぶのは川の流れが多岐にわたるので八つの橋が渡されているからだと教え、昔、在原業平が「かきつばた」の五文字を句の第一音に据えて詠んだ有名な歌の事を告げる。それは「唐ころも　着つつ馴れにし　妻しあれば　はるばる来ぬる　旅をしぞ思ふ」というものである。そして業平に「杜若」を詠まれた名誉を語る。その上女は、見苦しいところだがと、言いつつ僧を自分の庵に案内する（物着）。

やがて女は男装（冠唐衣を着て）で僧の前に現れた。僧が怪しんで尋ねると、この唐衣は高子の后の御衣、冠は業平が五節の舞に使用したもので、いずれも業平の歌に詠まれたものだという。なお怪しんで「御身はいかなる人ぞ」と聞くと、実は自分は杜若の精だと言う。

在原業平はもともと歌舞の菩薩（芸術の仏様）が衆生を導くために、仮にこの世にお出になったものだ。だからその和歌は、そのままみな法身説法の妙文であり、その和歌に詠まれれば、非常の草木（杜若の花）までも仏果を得て成仏することができるのだ（カケリ）。そう言って伊勢物語の故事を語り、舞（序ノ舞）を舞った女は、やがて成仏し得た身を喜びつつ消えてゆくのです。

□見所

・小書き「恋之舞」　序ノ舞の中、業平の装束を着たシテが橋掛りへ行き、その姿を欄干越しに水辺（白州）に写し、昔を思い浮かべる。その後、舞台に戻り懐かしそうに舞うのです。
・この曲は伊勢物語を主材とし、在原業平の事を描いている。。

・物着（ものぎ）　舞台上で装束などの付け替えをする事。

他に　能　「嵐山」　シテ　土田　英貴

能　「藤戸」蹉跎之伝　シテ　梅若　長左衛門

仕舞「頼政」角当行雄　「邯鄲」山崎正道　「善界」山中迓晶

狂言「雷」